山 512-1988・2・20

第512号昭和63年2月20日発行（毎月20日発行）
昭和48年8月31日 第三種郵便物認可

1988年（昭和63年）
2月号（No. 512）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

森林保護への提言
JAC自然保護全国集会……（1）
海外の山……（2）
シンポジウム報告
「チョモランマ登山に於ける高所の問題」
高所登山研究委……（3）
森林保護への提言を採択
自然保護委員会……（3）
第25回「この一本展」展示図書について（I） 望月達夫……（4）
第19回山岳図書を語る夕べ
図書委員会……（5）
支部事務局担当者会議
総務委員会……（6）
三国合同登山隊事務局だより……（6）
報告……（6）
三国登山会員募金応募者ご芳名…（7）
図書紹介……（8）
東西南北……（9）
追悼 加藤喜一郎さん
山田二郎……（13）
会務報告・ルーム日誌……（13）
新入会員・住所変更……（14）
お知らせ……（15）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜 10時～20時
水，金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話 234六六五九

# 『森林保護』への提言

## （社）日本山岳会自然保護全国集会

森林は、人をはじめとして生物が生きてゆくために必要で貴重な宝である。

日本は第二次大戦から戦後の復興期にかけて、多くの樹木を乱伐して、貴重な森林の一部が失われたが、それでもいまなお国土の七割は森林で、世界でも珍しい豊かな自然が残っている。

照葉樹林、夏緑広葉樹林は、移り変わる四季とともに日本文化の生みの親であり、古代人は森に衣食住の大部分を依存して、大切に扱ってきた。いま残っている自然林（天然生林）は、先祖の遺産である。

二十世紀の工業化社会に生きる現代人は、必ずしも森林を大切にしてこなかった。世紀末が近づき、環境汚染、崖崩れや地滑り、洪水など森林を大切にしてこなかった報いを、いま払わされているといえよう。

日本山岳会は一九〇五年の創立以来八十年、常に自然保護を重視し美しい日本の山と渓を次代に残す努力を重ねてきた。森林は日本の美しい山と渓のもとである。しかし今年五月に総合保養地域整備法が成立し過疎地対策、内需拡大の声とともに、乱開発で先祖の遺産である森林が荒らされることをおそれる。

また、このまま森林を荒れるにまかせれば、日本古来の美しい伝統である『木の文化』は人々の生活から、かけ離れて遠い存在となりかねない。自然保護、森林保護は、いよいよ大切である。

あと十数年で二十一世紀を迎えるいま、祖先が営々と育て、残してくれた森林を、われわれの世代が破壊し、荒廃させることは許されない。美しい森林を次代に残すのは、現代に生きるわれわれの使命である。

本日、第十三回日本山岳会自然保護全国集会において、森林保護について話し合い、認識を深め、基本的でかつ重要な事項について、次のとおり提言する。

記

一、国民総参加への推進。

森林の必要性に対する国民の理解も深まっているので、森林保護、林業の改革に関して具体策を取纏めるため、行政の枠を越えて、林業関係者、自然保護関係者など、幅広い国民の代表者による『国民森林機構』の設置を早期に実現すべきであり、日本山岳会も、同機構に積極的に参画する。

一、国有林の公益的機能重視の確立。

森林は林業資源として経済性に重点が置かれていたが、いまや保安林や自然公園などで、これまで以上に自然環境保全のための公益的機能が重視されてきている。

このように森林に対する国民のニーズが多様化するなかで、その公益的機能を維持するために、独立採算性による林野行政の特別会計制度を見直し、国の一般会計で賄うべきである。

一、国有林に関する権限の一本化。

現在、国有林については、林野庁がその殆どを管理運営しているが、自然公園では環境庁が、天然記念物は文化

庁が、行政的役割を分担するなど、制度、法律、財政措置などで整合性が取れていない。

国有林の大部分は、自然林として日本列島の脊稜山脈地帯にある。また、国立公園など自然公園のなかにある国有自然林は、自然景観としても優れており、大切に保存されるべきである。

現在、国立公園内の特別地域は、特別保護地区・一種・二種・三種に区分されているが、この特別地域の区分けも、関係官庁の所管が絡んで、環境保全、景観保全を重視した国民福祉の面から万全のものとは言い難い。また、所轄官庁の反対から、当然国立公園へ編入されてしかるべき地域、または原生自然環境保全地域の指定が困難などの弊害は除去されるべきである。

これらの弊害を取り除くためには、国立公園内の国有林の管理運営を環境庁へ移管するなど、行政の一元化とともに自然林保全のため、思い切った抜本策をたてるべきである。

一、総合保養地域整備法（リゾート地域法）の対策。

同法は、農林水産省など六省庁が主務官庁となって基本方針を定め、都道府県は基本方針に基づいて、構想を作成し、民間活力を導入、実施することになっている。

# 海外の山

## スコット魂、いま

とんがった部分のない、広漠とした地域を「山」の範ちゅうにいれることに違和感を覚える人もいるかもしれないが、タクティックス、厳しさ、冒険の精神など、たとえばヒマラヤと多くの共通項を持つ「極地」をこのコラムでは折につけて取り上げたいと思っている。一九八五年から八六年にかけてスコット隊の跡をたどり、徒歩で南極点に到達した英国隊のリーダー、ロバート・スワンが来日、日本山岳会で話をする（一月二十七日）と聞き、そんな訳で何はともあれ駆けつけた。

一九一二年一月十七日、ノルウエーのアムンゼン隊に一ヵ月あまり遅れて南極点に到達、帰路激烈な寒気と飢えから全滅したスコット隊の悲劇から七十四年、エヴァンス岬から同じルートを極点まで歩いてたどろうとした若者達の試みは、必ずしも全英の支持を受けた訳ではなかった。千五百キロもの距離を一切補給を受けず、しかも無線機も持たずに歩き抜こうというのである。「とりわけ政府機関は全く批判的だった」と三十一歳、胸板のいかにも厚いスワンは言う。

この冒険のため建造された六百トンの探検船「サザン・クウェスト号」でエヴァンス岬に上陸したのが八五年二月五日。九ヵ月のトレーニングを経てスワンら三人は十一月三日、一人二百キログラム分の食糧、装備を満載したそりを曳き、スキーをはいて出発した。一日五千百カロリーの食糧摂取でこの重さを引っ張るのは、よほどの体力を必要としただろう。一日八十キロ、八五キロ、当時二十九歳のスワンが寝袋で見たのは「おいしいものがいっぱいのレストランで私のところだけいつまでたってもウエイターが注文を取りに来ない夢」だった。

食糧に限りがある以上、前進が少しでも遅れればそれは死を意味した。とりわけ難関のバードモア氷河の横断中、中間地点を通過してからは、もう引き返すことはあり得なかった。平均一日二十キロ、時にはテントを張る時間も惜しく、氷河の上に寝袋でごろ寝する日もあった。

八六年一月十七日午後十一時五十三分、三人はほとんど奇跡的に正確に南極点に到達した。しかし、出迎えてくれるはずの仲間は一人もいなかった。彼らとプロペラ機を乗せてエヴァンス岬近くまで来ていた「サザン・クウェスト号」は氷に押しつぶされ、三人の極点到達のわずか十一分後に氷海に没したのである。幸い、全員氷上に避難し、無事だった。一切外部の力、とりわけ政府機関の助けを借りないつもりだった冒険者とその支援グループは米マクマード基地の飛行機に安全な場所への移送を願うハメになった。

四分の三世紀前、スコット隊のメンバーが使った当時のままの小屋の内部などスワンは豊富なスライドを使って、自分達の〝クレイジーな行為〟がもたらした成果について語った。四億円以上かかった経費の多くは民間スポンサー、帰国後の講演などでまかなったという。七百十四回目の講演にあたった日本山岳会ルームでの報告は一円にもならないものだったが、彼には新たな計画がある。英、米、ソ連、オーストラリア、そして日本の冒険者が一緒になって、今度は北極点まで歩こうというのである。それも地球の環境問題を訴えて。（江本嘉伸）

留意すべき点は『良好な自然条件を有する土地を含む相当規模の地域』の運用で、その実施に当たっては『環境庁長官ほか関係行政機関の長と協議する』ことになってはいるが、自然公園等の貴重な自然林など、大面積が侵食されるおそれが多い。国土保全の観点からも、乱開発は防止されなければならない。

一、自然保護思想の啓蒙、普及。

国をはじめ行政機関や民間団体は、美しく豊かな日本の自然を二十一世紀に残すために、これまで以上に、次代を担う青少年に対する自然保護教育に力を入れるとともに、国民全般への自然保護思想の啓蒙、普及に積極的に取り組むべきである。日本山岳会も、自然保護思想の啓蒙、普及に一層努力する。

（一九八七年十一月十五日）

## 『森林保護』への提言を採択

### 第十三回自然保護全国集会を開催

自然保護委員会

自然保護委員会は、十一月十四日（土）～十五日（日）東京・八王子、大学セミナーハウスで、第十三回自然保護全国集会を開き、今年の主要議題『森林保護』を中心に討議を行ない、『森林保護』への提言（前掲）を採択した。

参加者は、支部から十人、首都圏自然保護委員二十四人、一般会員三人。国見委員長の開会挨拶の後、第一部は参加者の自己紹介、支部報告が行なわれた。

最初に、青森の成田氏の『八甲田ロープウエイ建設問題は地元山岳会と野鳥の会が反対、白神山地の青秋林道は、水源保安林の解除に三千五百以上の反対が集まった。今後も支援と指導が欲しい』という報告があった。福岡の佐野氏は『屋久島にロープウエイを建設する計画があり、反対への協力と支援を』。また山陰の小西氏からは『大山の特別保護地区の砂防工事で、従来

報告

## シンポジウム「チョモランマ登山に於ける高所の問題」

### 高所登山研究委員会

昨年十二月十九日午後五時半より、三国友好登山事務局において表記のシンポジウムを開催した。参加者は四十五名。

講師には防衛大学山岳会チョモランマ登山隊の川上隊長をはじめ、山口、小林、松本、岩崎、細田氏ら五隊員と、撮映隊として参加した村口氏が出席された。

同隊は、一九八七年ポスト・モンスーン期にチョモランマ西稜からの登頂を目的に活動したが、途中、登攀隊長の遭難死亡という不慮の事故によって登山期間が制約され、悪天候と大量の降雪に阻まれて、最高到達点八一〇〇㍍から下山帰国したものである。

初めに川上隊長より遠征の概況が説明されたが、登山活動に入るまでの慎重な高所順応や、前半の行動を通じての基礎的指導の実際、とりわけ、雪崩の回避についての話は興味深いものであった。

結果的には、八一〇〇㍍に五名、全員が七三〇〇㍍に到達したとのことであるが、過去の高所登山経験者が比較的少いこともあって、若手の講師の個々の話を聴くと、高所問題のある部分については理解の不足や、研究の不十分な点が見られるという指摘があった。また、独自な組織内での階級性や、それから来る使命感による過度の精神的負担などについても意見が述べられた。

最近、海外登山の研究といえば、無酸素登山やアルパイン・スタイルなどの様式に関心が集まり、遠征に関する渉外問題や手続きなどに関する資料の収集だけが盛んで、登山そのものの技術や体力など細かい問題が取り上げられる機会は少いと聞いた。

恣意的な表現をすれば、どのような登山も基盤はあくまで個人の能力に依るものであろう。もちろん、高所登山に組織を整え、運営に意を用いることは当然大事なことであるが、また一方、それを支えるものはあくまで隊員個人の体力や技術、知恵や意欲であり、隊員同志の協調性など、一見きわめて小さな問題が登山の成否にかかわるきわめて重要な要因にもなるといえるのではないだろうか。

そのような問題を改めて考えさせられた点、有意義なシンポジウムであった。

講師の皆さんにお礼を申し上げる。当会に参加した三国友好登山の若手隊員諸兄の活動と無事を祈るや切である。

（文責・松永敏郎）

は資材をリフトで運んでいたが、ブナの大木を伐採して林道を造っている。特別保護地区であり、山岳会も林道建設に反対してほしい』との要請があった。

東海の三ツ石氏から『林道、登山道のオートバイ取り締まりを警察は取り上げてくれない』。富山の石坂氏は『立山は人が多すぎてゴミの処理に困っている』との報告。富山は大日岳から馬場島一帯の大開発計画が、リゾート地域法関連で検討されており、何れも今後の検討課題である。

また京都の吉村氏からは『林野庁の特別会計制度による独立採算性の歴史と現状、知床問題』の講話と報告。山梨の北野氏から『山梨県の高山植物保護条例』について説明があった。

古谷氏から『西丹沢に東電が百五十メートルの鉄塔と送電線を建設する計画があり、景観上問題で反対したが、代替案がなく、建設される』。また中村あや委員から『秋田の福田氏の伝言、森吉のゴンドラは予定より五十メートル下になった』と報告があった。

続いて関塚（担当理事）が議長となり、第二部の『森林保護、特に国有林の自然林』の討論に入った。

まず吉村氏から『いま何故森林保護か』との疑問が出され、議長から『日本の山の美しさの一つは森林、特に自然林がある。今年は知床伐採問題、白神山地のブナ林の保護と青秋林道建設など、多くの自然林の保護が問題となった。また五月にリゾート地域法が成立して、内需拡大、地域振興の要請もあり、日本中に大規模開発が目白押しとなっている。自然林の危機であり、森林保護を訴えたい』と議題の趣旨を説明。小委員会で検討してきた『森林保護』への提言の原案を、多少の字句修正の後、採択した（前掲）。

十五日は討議終了後、奥多摩・川井の水香園で懇親会、昼食、入浴後解散した。

（**支部参加者**）成田幸雄（青森）。北野良一、鶴田健蔵、丸茂キクエ（山梨）。小川　務、三ツ石　清（東海）。石坂久忠（富山）。吉村健次郎（京都）。小西　毅（山陰）。佐野昇三（福岡）。

（**一般会員**）篠崎　仁、古谷聖司、加藤裕二。（**自然保護委員**）国見利夫、関塚貞亨、横山　隆、池田　剛、黒沢秀雄、山口悠紀子、市川義輝、渡部温子、渡辺徹、斎藤かつら、梨羽時春、小西奎二、沢井政信、近藤　緑、奥野道春、麦倉　啓、高遠　宏、渡辺正臣、松丸秀夫、越智英夫、中村純二、中村あや、武田満子、田中茂夫。（**ほかに準備委員**）遠藤光男。（順不同）

（関塚貞亨）

## 第二十五回「この一本展」での展示図書について（I）

望月達夫

昭和六十二年十一月の「山岳図書を語る夕べ」（十九回）は、偶々私が本会に寄贈した山岳洋書を中心に、そのなかから何冊かを選んで話してほしいという図書委員会からの依頼があった。それで、その時話した内容の概要を以下に述べておきたい。

＊

（1）**W.M. Conway : Climbing and Exploration in the Karakoram-Himalayas. 1894.**（目録番号38）なお、文庫目録は三百円で販売します。（図書委）

ヒマラヤの古典として有名な本書には吉沢一郎氏の邦訳（『カラコルムの夜明け』一九六八年刊）があるので、ご承知の方も多く多言を要しないが、別巻（Supplementary volume）の Maps and Scientific Reports（39）が揃っているのは比較的珍らしいと思うのでとりあげた。古典的な色刷りの地図は極めて美しい。曽て『世界山岳地図集成―カラコルム・ヒンズークシュ編』（一九七八年刊）に複製されたが、その原図には本書の地図が使用されたと記憶している。（榎谷徹蔵氏旧蔵本）

（2）**W.M. Conway : Mountain Memories. A Pilgrimage of Romance. 1920.**（45）

―同―：**The Autobiography of a Mountain Climber. 1933.**（46）

この二冊にについては本会創立三十周年記念の「山岳図書展覧会目録」（松方三郎氏筆と伝えられる）（『山岳』30の1所収）にも、また薬師義美氏の著名な『ヒマラヤ文献目録』（一九八四年刊）にも同一内容のように記載されている。しかし、前者が勿論元版で、後者には内容の一部が省略されている点に違い

次代に残そう美しい山と渓

第十九回（昭62・11・26）

# 山岳図書を語る夕べ

図書委員会

今回は、すでに一昨年の年次晩餐会で今西会長より披露された、望月名誉会員から本会へ寄贈された図書について、同氏よりお話しいただくことになった。そして、この図書のなかから、『この一本』となるものを選んでいただき、展示し、第二五回「この一本展」として併催することにした、とまず大橋晋図書担当理事の挨拶があった。

さらに、同氏のお話の前に、この寄贈本について作成された「望月達夫文庫目録」が近藤信行図書委員長より望月氏に手渡され、当日出席したものには、特に無料で配布された（頒価三〇〇円）。それと、今回の申し出に報いるため、ささやかな贈りものとして、この寄贈本を収納する書架の鍵が島田巽名誉会員より望月氏に贈られた。望月氏がいつでも寄贈した本を見られるようにとの配慮からである。

望月氏は、蔵書を寄贈するにいたったいきさつを次のように語った。

それによると、事情があって家を直すことになり、家のなかに分散していた、中学のころから集めていた本を一つにまとめてみたところ、山の本だけでもかなりの数になった。そのうち和書のほうは適当に処分できるのだが、洋書のほうはそうもいかず、書庫でも作って、といったんは考えたが、よく考えると無駄であることが分かった。さらにこれまで、亡くなった方々の残した本を、遺族のかたと処分するような場面に何度も出会い、残された本の扱いかたにしばしば苦慮したことが思い出された。深田久弥氏や小林義正氏の蔵書のように一個所に納められる例は少なく、散逸してしまう場合が殆どである。このため、町田立穂氏の場合のように、本会の所蔵本と重複するものは売って、その代金で記念となるものを購入し、他の本とともに会に寄付するといったことも考えた。しかし同氏の場合にはそういったことの出来ない事情があった。それは、古い会員だった榎谷徹蔵氏の蔵書が七十五冊ほど入っていたからである。

当時、榎谷氏の遺族からそれらの本を評価してほしいと依頼され、イギリスのガストンに問い合わせ、適正に評価した。ところが重ねて、それらを処分してほしいと遺族から頼まれ、遺族と話しあって、望月氏がそれを買い受けることになった。このような事情があるため、榎谷氏の本が混ざっている同氏の蔵書は分散させたくなかった。榎谷氏の蔵書に珍しい本が含まれている。ここにとりあげた理由の一つは、その点にある。

マウンテン・メモリーズという題名は、いかにも耳によい響きを覚える。木暮理太郎氏の『山の憶ひ出』とずばり一致するのも偶然であろうか。因にジャヴェルの例の名著の英訳は Alpine Memories だが、マウンテン・メモリーズという題名に一籌を輸すると思うのは私だけであろうか。

**(3) C.D. Cunningham & Cap. Abney : The Pioneers of the Alps. 2nd ed. 1888.（50）**

前記山岳図書展覧会目録には「開拓時代のアルプス登攀史並に当時勇名を馳せた山案内の銘々伝。（中略）物故並びに当時現存山案内の猛者を網羅し、彼等の肖像も掲げてある」とあるが、いまそれに加えることは殆どない。メルヒオール・アンデルエック、クリスチャン・アルマー等々の肖像は見事である。それらは非常によい印刷で『先蹤者』などのガイドの写真は、おそらくこの本からとられたものと推定する。

**(4) O. Eckenstein : The Karakorams and Kashmir. 1896.（61）**

一八九二年のコンウェイのカラコラム遠征に参加したときの個人的紀行。エッケンシュタインは一九〇二年にもK2へ行っているが、その時の彼による単行本はないようである。古典的なシュタイクアイゼンにも彼の名が残っている。本書はどちらかと言うと小型だが、比較的稀覯本の部類であろう。（榎谷氏旧蔵本）

**(5) D.W. Freshfield & V. Sella : The Exploration of Caucasus. 2 vols. 1896.（81）（82）**

コーカサス山岳文献中内容体裁共に最高峰と言ってよく、サイズもインピアリアル・オクターヴォ判の堂々たる書物。著者のサインがある。本書には限定版があるが、私の記憶に誤りがなければ、装幀が変っているものの、セッラの素晴らしい写真の印刷は普通版と殆ど変りないことである。戦前、故藤島敏男氏の蔵書で限定版を見せていただいた記憶がある。なお本書については『先蹤者』に詳しい。

**(6) A.P. Harper : Pioneer Work in the Alps of New Zealand. 1896.（95）**

ハーパーはACの名誉会員に推挙された登山家で、ニュージーランド・アルプスの先駆者であった。NZ

たこともその理由のひとつであった。

そうこうしているうちに、同氏の蔵書リストを見た何人かの本会会員が、日本山岳会に寄贈したらどうかと助言してくれた。会で受け入れてくれるなら、対価なしで寄贈してもかまわないと思い、その旨を今西寿雄会長に申し出て、今回、望月氏の蔵書が寄贈されることになった、というのがそのいきさつである。

それまで望月氏の家のなかに分散して置かれていた本が、一つの書架にまとまったのを初めて見た、と同氏は図書室に納まった自分の本を指し言っておいでだったが、この日の出席者と笑いながらそう言われる望月氏の顔には、嫁にやった娘を思う親のような表情も窺われた。

以上のような説明があってから、同氏は、机の上に置かれた『この一本』について一冊ずつ説明された（内容は別掲）。

（岡沢祐吉）

## 支部事務局担当者会議

総務委員会

十月三十一日、京都で行なわれた全国支部懇談会に先立つ時間をさいて、本願寺会館において、支部の事務局担当者会議がもたれた。

これは、日頃、支部運営にたずさわっている者が、山岳会活動について共通の認識を持ち、お互いの情報交換を通じてより良い支部活動に役立てることをねらったもので、当日は村木副会長、松田評議員をはじめ、本部から八名、全国十四支部から二十一名の出席を得て、二時間半にわたり真面目な議論が交された。

各支部の現況報告、本部への要望、本部の会務報告等、内容の濃い話し合いの中から、より充実した支部運営に向けて夫々が認識を新たにした意義ある会議であった。

なお、この種の会議は、会の正式な会議として、毎年実施するようにしたい。

**出席支部**　北海道、秋田、宮城、越後、信濃、静岡、東海、京都、関西、富山、山陰、福岡、熊本、宮崎

（石橋正美）

## 62年忘年会

（会員懇談会）

総務委・青懇委　婦懇委　共催

十二月十二日（土）、今年の忘年会も七十三名の参加者を得て大盛会だった。堀田彌一氏のお話、ナンダコート登頂の太田晃介会員のお礼の言葉、宴たけなわの最中、共催三委員会委員からの寄贈品とアポロスポーツ店からの提供品の数々を、福引の景品として参加者全員に、もれなく配布。特賞の高田真哉会員に、感想文を寄せて頂きましたので、次に掲載させて頂きます。

＊

### 婦人懇談会、恒例の忘年会

婦人懇談会のビアパーティと忘年会は、会員にとって最も楽しげな、心待たれる二大イベントといってもいいだろう。

その忘年会が〝食べ放題、飲み放題、会費二千円〟と銘打って旧ろう十二日、総務・青懇両委員会との共催により、ルームで開かれた。

開宴の序幕となったのは、五十年前のナンダコート遠征を回顧された堀田弥一名誉会員。抜群の記憶力と、たんたんとしたその口調に、参会者一同新たに深い感銘を覚えると同時に、開宴に逸る心は和んだ。

やがて河野幾雄会員の発声で乾盃、華ばなしい開幕となった。

テーブルには各種アルコール類が林

---

「この一本展」の早期の登山を述べた古典として第一のもの。これと合わせてC.E. Mannering: With Axe and Rope in the New Zealand Alps. 1891. (135) が比較的珍らしい部類かと思う。

（以下次号）

「この一本展」

---

三国合同登山隊事務局だより

## 三国友好登山隊準備報告

事務局長　橋本　清

十二月六日、第七回総合準備会を日本テレビ大会議室にて行なう。報道隊員も決定し、登山隊事務局では手狭になり、大会議室をお借りする。会議は午前十時より、大塚実行委員長のあいさつ、輸送・梱包の経過報告、と行なわれた。現在、隊荷は南北とも、日本通運に引渡し、保税倉庫に保管されている。

北側の隊荷三十五トンは、十二月三十日、横浜を出航、一月三日、天津新港に到着予定。南側の隊荷十三トンは、十二月三日、横浜を出航、十二月三十日にカルカッタ着の予定です。この登山隊隊荷の中には報道隊隊荷九トンも含まれております。

事務局では、パッキングリストのチェック、荷上量、担荷量の計算チェックを行なう。

昼食後は実技訓練として、酸素器具、通信機材等の説

明が行なわれ、細部の注意をする。

日本テレビからは、今回開発された、小型カメラの使用説明がなされ、午後五時準備会は終る。

**読売新聞社チョモランマ空撮**

読売新聞社がかねてから計画しておりましたチョモランマ空撮が、中国登山協会及び中国科学院の協力により、十二月十八日より、チベット自治区、ラサを基地に行なわれた。

十二月十八日は最初に岡島記者、鯵坂カメラマンがフライトし、十二月十九日には日本テレビ、智片カメラマンと山岳会の重広がフライトする。午後、鯵坂カメラマンと橋本がフライト。ラサより西に五十分、好天に恵まれ、チョモランマ上空から山頂はくっきり細部まで確認できる。北東稜、南東稜の稜線の状態、南北ルートの距離間較差、ノースコル、サウスコルの標高差が実に良くわかり、最高の偵察ができました。

準備段階も終盤をむかえ、このような機会にチョモランマ上空からの偵察が出来ましたことは幸いでした。読売新聞社の好意に対しお礼申し上げます。

空撮は十二月二十日のフライトを最後に、十二月二十二日、ラサを後に、成都、北京を経て帰国しました。

**第八回総合準備会**

第八回総合準備会を一月十日、日本テレビ大会議室にて行なう。今回は、南北とも隊荷の発送も終り、いよいよ出発が気がかり、という時期になる。北側本隊は二月二十二日、南側本隊は三月九日成田発と決まる。

北側は北京へ、南側はカトマンズへ、五月五日のチョモランマ／サガルマタ頂上交差縦走をめざし出発する。

準備会では総まとめを行なう。各担当者には作成したリストの提出を願い、書類の整備を行なう。隊が大きいだけに、書類の量も多く整理には時間がかかる。

午後からは現場に目を移し、一九八〇年の北東稜の記録をビデオにて見る。ルート等のこまかい説明は、先の読売新聞社のチョモランマ空撮のスライドにて行なわれた。

実務的準備会も最終段階に入り、出発までのコンディションの調整を行なうよう伝え、準備会を終る。終了後、全隊員にて新年顔合せ会を「トレビの泉」にて行なう。席上、全隊員、一丸となって五月五日の交差縦走を成功させることを誓い、なごやかに会を終える。

**三国友好合同登山会員募金応募者ご芳名**
**（一月十五日現在、一口五千円）**

**（二〇口）** 西堀栄三郎、大橋秀一郎、明治学院大OB会。**（一〇口）** 村木潤次郎、鈴木郭之、庄司駒男、西原春夫。**（七口）** 荒井紀子。**（六口）** 愛知学院大学学友会山岳部。**（四口）** 高橋早苗。**（二口）** 朝比奈英三、木村俊博、福田文二、山口一孝、佐藤耕三、渡辺昌一郎、田村宏明、小田哲夫、中山昇一郎、川北昌博、三鍋久雄、中島信一、今井祥司、宮川良雄、余部守男、中川和道、影山英雄、田中三郎、荒木健次、宮川清明、中谷宝悦郎、中川久。**（一・五口）** 中俣新一。**（一口）** 伊藤紀克、久我良房、加藤輝一、久保三朗、加藤義明、土田平三、高田誠、室次雄、広瀬誠、室光子、遠藤光男、森田忠、千田早苗、福田光子、橋本克巳、前田中庸、深田泰三、荒野康子、熊谷正志、熊谷藤子、今福克保、佐野昇三、白井雅巳、高柳生雄、佐藤英雄、石田喜八、山田信明、乾能尚。

**〔累計一、五五六・七口。六一五名。金額七、七八三、六〇〇円〕**

**三国合同登山隊事務局だより**

立し、心尽しの料理がところ狭しと並べられ、宴はいやがうえにも盛り上った。銘酒・八海山がぬかりなく配置されたのも心憎いところだ。随所で談笑の輪が広がって行ったのはいうまでもない。

宴半ばにしてパキスタンの登山家、シェア・カーン氏が来会、一斉の拍手のなか紹介される。同氏も即座に談笑の輪の人となり、その場の雰囲気に融け入った。

恒例の福引きが発表される。ほおをさらに紅潮させる一瞬。特賞のザックから小物まで、参会者全員にもれなく景品が手渡された頃には、テーブル上のそれらも納まるところに納まって、やがて終宴を迎えようとしていた。

一隅でコーラスがはじまる。そのうた声はフィナーレを飾るにふさわしく、盛会の余韻を惜しむかのように美しく篭った。

満ち足りた顔が一つ二つ、戸外に消えて行く。その軽い足どりは早くもビアパーティに想いを馳せるように。

**（高田真哉）**

## 三浦富士で新春自然観察山行

自然保護委員会

自然保護委員会では新春一月九日

（土）、自然観察山行を三浦半島の先端近くにある富士山（通称、三浦富士、標高一八三・六㍍）で行なった。

年々宅地化の進む三浦半島もこの山は緑地特別保全地区に指定されているので、まだまだ豊かな自然が残されていて自然観察にはもってこいの所である。あたりの林相は温暖な地であるから常緑樹が多く、とくに山腹をおおうマテバシイの木は厳冬にもかかわらず心なし柔和な姿を見せている。

一行十九名は京浜急行品川駅に集合。京浜急行長沢駅で下車。駅前のスーパーで新年祝賀の準備を整え、団地を抜けて山中に入った。山中は一転してシノダケや常緑広葉林となって昼なお薄暗いほどの自然が残されていて、それを観察しながら登った。約一時間ほどのアルバイト。

山頂はそれほど広くないが、二等三角点、二基の浅間神社奥宮のどっしりした石祠、その他、地蔵様や記念碑などがあって小さいながらいかにも山頂らしい。そしてまわりは樹木に囲まれてはいるが、梢ごしにかなりの眺望がひらけ、東京湾をへだてて鋸山を中心とした房総の山々、太平洋の波涛、そして左手相模湾の彼方には秀麗の本物の富士山も望まれた。

二等三角点の三浦富士から同じく二等三角点の本家本元の富士山をみるというわけだ。海も山も美しい山頂の憩いのひとときを。

早速、持参の木炭がおこされ焼鳥（バーベキュー）をつくりそして新春の祝杯があげられた。

長い山頂での歓談。いかにも自然保護委員会らしい自然保護の話題が多い。そして今年もまた頑張って活動しようという気概も委員のなかにうかがわれた。

三浦半島の新春の空は抜けるように澄んでいた。

下山は野比駅に一目散。電車の時間をたしかめ、駅近くの喫茶店でまたも時間のくるまで談笑、再び自然保護の重要性を確認して解散となった。

**参加者・順不同**　黒沢、小塩、渡辺（正）、高島、国見、松丸、小倉、渡部（温）、関塚、山口、近藤（緑）、沢井、佐俣、遠藤（光）、池田、斎藤（か）、小山、村川、的場。以上会員外を含み十九名

（小倉　厚）

## 北海道支部忘年会

北海道支部忘年会は、十二月十二日（土）午後六時より、札幌駅前通り雪印パーラー地階『ゆき』で開催、橋本支部長初め二十六名出席で盛大に行なわれた。

## 図書紹介

### 木と人間の宇宙（Ⅱ）

青春を川に浮かべる

宇江　敏勝著

本書は『木と人間の宇宙（Ⅰ）』―若葉萌えいづる山で―の続編である。前書が、造林作業から伐採にいたる工程を記したものだが、本書は林業のその後の工程、出荷以降を扱ったものである。第四章は副題となった、青春を川に浮かべて、は文字通り木材の流送、筏師の聞き書きから始っている。舞台も同じく果無山地を流れる十津川（熊野川）。語る人は中森叡と上北六男の両筏師。訥々とした話し言葉で筏師の生活、作業の形態やコツ、苦労話、シカケや道具類までに及んでおり、この十津川でも上乗り、中乗り、下乗りなどがあったことが知れる。しかし戦後はダムの出現で筏師もやがて終焉をむかえる。

第五章はさらに筏で運ばれた木材の次の行く先はいよいよ材木商の手に渡る。そこで登場した人物が材木商で成功した杉本義夫氏である。

そして最終章（第六章）の山に棲む日々は筆者の最近の生活日記（一九八五年一月九日～三月十三日）であるが、単に林業の日記にとどまらず、現在のこの地方に伝わる行事、風習までおりこんでいて参考になる。

筆者の現在は午前中は山仕事（自己所有の山で）、午後は机（執筆）の生活だという。晴耕雨読にも似た羨しいような生き方にもみえる。

とにかく全篇を通じて、森林には大いなるドラマがあり、またロマンがあることを本書は教えてくれている。登山者と言えども森と無関係ではない、是非とも一読に価する良書と言えよう。

（小倉　厚）

一九八七年五月　福音館書店刊
三六八ページ　定価一五〇〇円

### スイス―山案内人の手帳より

岡澤　祐吉著

前々からこんな本があったら、と

先ず橋本支部長より開会挨拶、続いて佐々前会長の辞、五日の東京の晩餐会・支部長会議に出席の平野事務局担当より両会議の説明があり、小林副支部長の音頭で乾盃。大雪スキー一騎討、狩場山支部山行、観月会山行ホロホロ山、東北七時雨山集会、京都全国支部集会等の行事を振り返り、次の年の北海道支部担当の全国支部懇親集会を成功させようと話が弾み、会場は一段と盛り上る。

今年新入会の岩佐、茂木両会員にチョモランマのネクタイピンが支部長より手交され、柳田集会委員の司会で、出席者全員の一言メッセージは、拍手、爆笑、素晴しいと感心する声等交錯する。

次なる年は、全国集会に取り組む誓いをし、例によって二次会『つる』へ。

ホワイトイルミネーションに輝くサッポロでの、山岳会員の楽しき一夜の宴であった。

**出席者・申込順** 岩佐敏彦、茂木義明、朝比奈英三、井後幸太郎、野田四郎、浅利欣吉、柳田凉子、横田春雄、石井忠雅、高澤光雄、佐々保雄、佐々喜久恵、佐々木幸雄、久保田優一、小林年、小野肇、水科行雄、小須田喜夫、亀井秀子、橋本誠二、平野明、河村皆子、阿部淳、杉野目浩、大久保五郎、川越晧充

（平野　明）

## 故武田久吉博士の富士山関係写真の整理を終えて

渡辺正臣

一九二〇年と一九二一年の夏に武田博士は、富士山の植物調査をされたが、そのメモと写真四二四枚が日本山岳会に保存されている。昨年の春、それの整理を依頼された。

メモは行動記録で、歩かれた順を追って、麓から山頂まで、植物名が所在場所とともに克明に記されていた。

写真は六袋に分類されていて、私はてっきり撮影順に分類されているものと思い、作業は簡単と早合点し、お引き受けしたが、写真はその後の出版物の都合で、乱脈に袋分けされているのを知った。

私は戦前に二度、博士のお供をして富士山を歩いており、博士の撮影手順をおぼろげに知っていたので、それが

**図書紹介**

希っていた本がようやく出版された。大正から昭和（戦前）にかけてアルプスに登った日本人と彼らの足跡についてのコンプリート・リストである。（著者が採った独特の調査の手法—山案内人手帳の記載に依據することで時代は槇有恒氏から始められる）。この時代の状況を総括すると、アルプスは東洋の遠国から長い船旅の彼方にあり、大英帝国が世界の版図をまだ占めていた頃だ。人々の基本的な動機は近代登山の発祥の地、氷河で作られたアルプスに一度でも触れてみたい、ということだった。この単純な望みが幸福にも、槇有恒氏の大きな成果を生むことになったが、あとに続く多くの人々の足跡が、通常ルートによる月並のものが多かったとしても、当然だったと云える。それでもこの時代の人々の体験は、登攀の難度など問うことなく、多角的にわが国登山界の発展に深く益したことは間違いない。しかしこれまで、様々な先輩の個々の足取りや当時の状況を急に知りたいと思っても、名著名文はたっぷりあるのに、即座に知るのはむずかしかった。多くの人がこの不便さを味わったことだと思う。たとえば—戦前の日本人アルプス登山のベル・エポックともいうべき秩父宮の登山には、一流のガイドと令名高い日本人登山家が蝟集しているが、この群像の足跡は錯綜して、麻生武治さんのお話を何度伺ってもうまく頭に入らない。乱麻をときほぐし、その時代のエネルギーを個別に分解して見せた本は今までなかった。本書で初めて私達は、一九二〇年代、三〇年代にアルプスに触れた山岳会諸先輩の足取りを、一冊の中にすぐ様知ることが出来るようになった。実に格好で適切な本だ。と同時に著者が本書を編むために自分に課した大変な労苦を思わない訳にいかない。歴史の基本物証として山案内人手帳をスイス山間の現地に探し求める。遺族と文通を重ねる。傍ら登場者の執筆物全部に目を通す。しかし著者の労苦の結果、各務良幸氏の独特の山の世界、その他、登山界とは縁のなかった多くの方々の存在を知ることが出来た。アルプスを愛した人は登山界の人達だけではなかったのだ。本書が一つの時代を誠実に切りとった信頼すべきレジスターになっている所以でもある。しかし著者が山案内人手帳に近づいたのは、証拠物件としてだけではなかった。その中に見出される日本人の手になる記載に著者は、「純粋にスイスの山に登る喜び」を感じとり、これに対する深い共感

**図書紹介**

この整理に随分役だった。

結局は整理に六カ月程かかってしまったが、整理し、ファイルし終えて、あらためて博士の緻密な調査に頭の下がる思いがした。

調査の時の博士は、例え車の通る道であっても、全部足で歩かれる。富士山のあの長い裾野の道もそうであった。メモをとり、写真を撮りながら、その合間にわれわれに細かに説明され、あのシャンとした姿勢を頂上まで崩されなかった。

整理は完璧なものでなく、僅かではあるが、不明のものがでた。折にふれ整理を続けて行きたい。

この六カ月間は、富士山の自然をこよなく愛された博士のお供をしているような気分になり、毎日がたまらなく嬉しかった。

チャンスを与えてくれたフィルム委員会にお礼を言います。

（フィルム委員会）

## 三水会

### 新年現地集会

新年山行はここ数年、坂倉会員先達の奥武蔵が恒例であったが、今年はまた一段と趣向をこらし、田部大先輩の名文にあやかって、栃本を起点に「山の神峠」から「秩父湖」への自然歩道を歩くユニークな山行が計画された。

小生よんどころない所用で一電車遅れて着いた今宵の宿「甲武信」の囲炉裏端には、既に見慣れた三水会の猛者達が鎮座、いずれの顔も早やほんのり紅らんで見えるのは焚火の故ばかりか……。

此処は秩父最奥の部落とはいえ、江戸時代は堂々たる関所がおかれ、雁坂峠への甲州往還、三国越えの信州道に「入鉄砲、出女」への目が光った要衝の地。それかあらぬか、宿の黒光りした長押には此の家の歴史を語るかのように古代錦に包まれた一槍が飾られてあった。斉藤会員の乾杯音頭で始まった宴が一波終った所で、館主千島さん（元甲武信小屋主）の秩父の自然保護についての貴重な講話を伺った。林野行政の矛盾を突き、雑木林こそが水源函養と地耐力保全の重大な鍵であると説き、延びるに任せた植林事業の衰退を憂うる語り口は、一本一草を知り尽した人のそれだけに切迫感がわれわれの胸にひしと伝わってくるのであった。

さて今宵の宴の圧巻は、千島夫人指導による本場秩父音頭の演舞であった。

酒よし、友よし、かくして秩父栃本の夜は暮れていった。

明くれば快晴、昨夜の夜気が雪に変ったか、山はうっすらと雪化粧。絶好にうたれ、ほぼ十年前からこの仕事にかかった、と書いている。

（田口二郎）

図書紹介

一九八七年十月刊、ベースボール・マガジン社　定価二二〇〇円

## ネパールの社会構造と政治経済

西澤憲一郎著

わが国からネパールを訪ねる人は年々増えて、その数は年間二万人とも三万人とも言われている。

その多くはあの雄大なヒマラヤに登ろうとする登山家か、そのヒマラヤの高峰を一度は目にしたいと美しい峠を越えるトレッカー、古い寺院や、今ではわれわれから失われた素朴で人情濃やかな人々との出会いを求めて旅する人であろう。また技術協力や経済援助等で在住している人も多いであろう。学者や専門家がそれぞれの道での研究のための訪ネもあろう。日ネの交流は今後愈々盛んになるであろう。慶賀すべきことだと思う。

さて、如上の人々が果たしてネパールの現状―その成立ちから今のおかれている状況―についてどれ程の認識あるいは知識があるのであろうか。

ここに紹介する元駐ネパール日本大使西澤氏の標記の著書はこれに十分、否、十二分以上に答える好著といえよう。

「ネパールは世界の最貧国の一つである。北インドやバングラデシュでその凄まじいまでの窮状を見てからネパールに入った人々の目には、ヒマラヤの壮大な景観は言うまでもないが、至るところ田園は四季とりどりの緑や花の色にいろどられ、村々には石造の家が立ち並び、山の斜面は天に届けと段々畑が整備されていて、ネパールは優雅で豊かな国のようにさえ思われる。インドに較べて乞食の数は少ないし、小さな子供まで健気に働いており、人々は親しみ易い。現実は一人当りの国民所得はインドの三分の二でバングラデシュと肩を並べる貧国である。何よりもその貧困を物語るのは平均寿命四十四歳という数字であろう。死亡率の高い理由はいろいろあるが、結局は貧困と栄養失調が最大の原因である」とはじめに述べ、多数民族を擁し、つい一九五一年まで鎖国していた、現ネパール王国の成立の経緯、その社会構造の客観的分析、現在置かれている政治経済の状況、そして或る意味では悲観的なその国の将来への展望などが平明に述べられ

の登山日和に全員勇躍「山の神峠」へ向け出発。一汗かいて登りつめた稜線からは、両神、和名倉の二千㍍峰を目前に、十文字から甲武信まで、曽遊の秩父の山々が指呼の間にあった。山の神の小さな社前にぬかづいて小林会員の一句

霜深し　山の神てふ　峠にて

緩い登下降を何度か繰り返し、最後の急傾斜を慎重に下ると、もうそこは二瀬の部落、バス停まではほんの一投足、全員元気で新年山行を終る。

**参加者**　岩堀（女）、岡野、河合、川上、小林、斉藤（健）、坂倉（女）、高田、遠田、遠田（女）、中、橋本（女）、林、広羽、中村（女）、斉藤（直）、荒野（女）、木村外四名（順不同）

**（文責・木村）**

## 第十三回　丹水会報告

秋春年二回、丹沢探索をつづけてきた丹水会も七周年を迎えた。第十三回、記念の催しは、十一月二十八日世附キャンプセンターでの夜の集会と翌日の不老山山行という企画である。

当日は、各自の名前を彫ったマグが記念品として用意された。さすが堪醉と自称する集いらしいはからいだ。マグを片手に夜の集会に参集した五十人近い面々、まずは近藤信行氏の中国登山のみやげ話に耳を傾けた。近藤氏は六月～九月の三カ月間、静岡大学登山隊の中国クラウン峰遠征に同行、登頂は果たせなかったが、氷河上の流水の話をはじめ興味はつきない。酒宴に移り、故折井健一氏ゆかりの飛騨娘や紹興酒など好みの酒を酌みかわしながらそれぞれが丹沢、丹水会とのかかわりを披瀝しあう。ひとまずおひらきとなって時計を見れば十二時半だ。

翌朝は八時五十分出発。眠りの足りない顔に冷たい空気がここちよい。つりばしを一人ずつ真剣な表情で渡り終わると山道に入る。ほどよい登りをゆっくりと楽しみ、ガスに煙る世附峠でひと休み。不老山頂上に着いたのは十一時十五分だった。頂上では、恒例となった幹事のいれてくれた本格ネルごしコーヒーを味わう。帰途は番ケ平から山市場に降りる。

天候はいま一つであったが、ふもと近く秋最後の紅葉がひときわ紅く目に映えた。

この日は、われわれ一行のあとから、百人余の年配の団体が登るという賑いだった。不老山の名といい、格好の山なのだろう。

**（岩堀瑞子）**

## 会員通信

**（長谷川恒男会員より編集宛）**

私たちは今、新ルートより取りつき、七五〇〇㍍までザイルを伸ばしたところです。

実質的な登山活動は十二月に入ってから、それも、まだ十日間ほどしか行なえませんでした。チョモランマは連日、強風にさらされ、私たちが近づくのをはばんでいるようですが、なんとか八八四八㍍まで迫りたいと思っています。（一九八八年一月二日、チョモランマ登山隊BCにて）

＊　＊

**（晩餐会の返信用はがきの中から会員の皆さんの近況等を紹介します。紙面の都合で割愛させていただいたものも多数ありますがご了承ください。**

**――総務委員会）**

＊

相変らず若い人と低い山を登っております。裏の高麗山へは天気が良ければ散歩しており、本年度一二五回。

＊

次男が三井銀行ブリュッセル支店で滞欧生活七年で、EC圏の旅行は一巡しましたので、来夏帰国の節は父子で甲信の博物資料廻りができれば幸甚と思っておる老兵です。

山梨・百瀬舜太郎（一三二四）

＊

十月二十日から福岡まいずる山岳会有志による台湾玉山登山団団長として訪台し、十二月五日前後は以前から沖縄八重山群島の西表島の熱帯ジャングルの冬季の風光を見る為に石垣島へ行く先約があり、残念ながら欠席です。

福岡・三日月直之（一六八四）

＊

ご存知の方もあると思いますが、木暮美枝子さんが去年十二月に亡くなられました。これで木暮理太郎家は途絶えたのですね。木暮家墓地は多摩霊園です。　千葉・小野　幸（一八三八）

＊

八十歳になり読書、庭いじりで明け暮れています。今も山登りを心掛けて

神奈川・近藤恒雄（一一九四）

＊

**図書紹介**

ている。

既にかの国を訪れた人にも、これから訪れようとする人にもぜひ一読をお薦めしたい。

なお、同著者には「ネパールの歴史」の好著もある。今回の著書を横糸で綴ったものとすれば、前著は縦糸で織ったものだ。　**（斉藤健治）**

一九八七年十月刊、勁草書房　定価二七〇〇円

**図書紹介**

います。

東京・名須川　浩（二〇七六）

＊

十月二十八日、坤六峠から武尊田代へ晩秋の山道を歩き、木の根沢の紅葉は最盛期。峠からは鳩待峠、至仏山が指呼の間で、近い将来この道路が登山者に利用されれば尾瀬から武尊、湯の小屋を経て変化の多い山旅が楽しめると思います。

群馬・山田京一（二一三六）

＊

山に登らざる山男の記を自費出版しました。昭和十七年沼井鉄太郎先輩のご紹介で入会したときは、まさか一生山に登れなくなるとは思いませんでした。正月で六十八歳になります。

神奈川・横田敬一（二二二五）

＊

地道に越後の周辺の山々を歩き続けております。

新潟・山田一男（二三五〇）

＊

満八十歳になり、心臓が少し悪いものの元気で農耕に励んでおります。ハウスで花作りをやっており、暇があると山の本を読んだり、バス旅行に出掛けています。

長野・湯浅充泰（二三八二）

＊

病棟七階から飯豊・大日岳をはじめ越後の山々が展望できます。目下、手術後一年の精密検査を兼ねて入院中で、今月末には退院します。

新潟・森谷周野（二四一〇）

＊

私の山は、昭和八年母校（今の名古屋大学）山岳部に入部以来ですが、本会への入会は昭和二十年頃と記憶しております。在名当時は、本会の仕事も多少はお手伝いしましたが、東京へ来てからはお役に立ってはおりません。七十二歳の今年も山へ三回、スキーも一回行きました。

東京・中埜愛三（二四七八）

＊

今年五月には会議でシャモニーに出掛け、エギーユ・デュ・ミディの上からヴァレー・ブランシュの氷河のスキー滑降を楽しみました。

神奈川・木下是雄（二五六三）

＊

九月に平ケ岳に登りました。七十六歳にはちょいとこたえました。

新潟・宮島孝一（二六六〇）

＊

病院通いですが、古い山の本を読んで昔をしのんでおります。

大阪・島村為男（二六七九）

＊

夜寒してほの片月や石の径

埼玉・千谷壯之助（二七六九）

＊

教職を退いて十年。大町市の依頼で市の登山史を書き、今は書き残したものや、まつわるものをまとめています。地の利を幸い、暇をみつけては峠歩きなどの山歩きをしています。大町山岳博物館では会のお世話になっており深謝申し上げます。

長野・丸山　彰（三〇九八）

＊

山の湧出湯旅館ひげの家では新浴場完成し、さらに露天風呂には星見風呂と名付けました。会員皆様のご来湯をお待ちしております。

福島・後藤泰治（三二二六）

＊

ご無沙汰しております。老人になって思うようにならず皆さんとご一緒の行動ができなくお許し下さい。満八十歳になってしまいました。

山形・石井貞吉（三五二五）

＊

退職してはや三年目。昭和生まれも晩餐会前に還暦を迎えようとしています。趣味の農作業と育林に明け暮れ、林のシンポ、森林見学等で年二回位は遠方に出掛けています。

山形・金森繁三郎（三六三七）

＊

今年は関西支部行事の山行も盛んでしたし、個人的にも東北へ五回も行けるなど恵まれて、楽しませて頂きました。冬をひかえ、雪の山に良いチャンスの多からんことを祈っております。

兵庫・久保三朗（四〇七九）

＊

本年度二回目の山行として、長崎・佐賀県境の多良岳へ登りました。参加者二十八名、全員元気。

福岡・堤甚五郎（四一六二）

＊

十一月に入って二度雪が降りました。十二月の雲取山は積雪十㎝前後、温度マイナス五～十℃です。北面は四本爪アイゼンが必要になります。

雲取山荘・新井信太郎（四三六七）

＊

所用のため出席できませんがお陰で元気にしています。近頃は史跡友歩会等歩こう会や山の会のお世話をしています。

大分・橋本祥案（四三七五）

＊

元気で山に登れる年配に戻れるものなら、と思います。八十四歳、体力も脚力も衰え、わずかにスキーで野山を楽しむ状況です。

東京・黒田初子（四四四二）

＊

今年は新潟県山岳協会記念山行で斉藤平七さん、笠原藤七さん（八十五歳）をはじめとして中国・北朝鮮国境の長白山を登山してきました。

新潟・藤井　信（四四六八）

＊

信州緑を守り育てる会（元日本医師会長花岡堅而氏）を本年四月五日に創立し、信越国境の鍋倉山一帯のブナ原生林を守る運動を進めています。奥志賀高原カヤノ平から野沢温泉にかけても切られたブナ林跡地があり、上ノ平には若干ブナ林が残っています。これからも地元民で守ろうと動いています。野々海も切られています。ご協力を乞う。

長野・佐藤　貢（四五一五）

＊

長いブランクの後、またボツボツ山歩きができるようになり喜んでおります。久し振りに泊まる山小屋の快適というか贅沢というか、昔と比べて驚いているこの頃です。三千㍍の稜線にある天水の風呂、山へ来ても毎日のシャンプーの習慣を変えない娘さん達。この汚水はどこへ流れていくのか、と考えることの多い山行です。

神奈川・山本治美（四七二四）

＊

八月にナンガ・パルバットの麓まで行ってきました。

奈良・米沢　清（四七四六）

＊

最近は高い山を見合わせ、丘陵地帯の山遊びで間に合わせています。山にはいって七十年を回顧しています。

秋田・武田太郎（四七五九）

**（以下次号）**

## 追悼

### 加藤喜一郎さん

山田二郎

「喜一が入院した、余り良い状態ではないらしい」と云う電話をうけたのが十一月末、早速、宮下君が中心になって、手術のための輸血の準備も進められた。慶応山岳部の学生、OBは云うに及ばず、日本山岳会からも三国友好登山の準備に忙しい隊員の方々や、村木副会長までも献血頂けることになり、何時でも手術に取り掛かれる態勢が出来上っていたと云うのに。その後、僅か十日余、十二月十日、手術を受けるいとまもなく、忽然としてわれわれの眼前から姿を消してしまおうとは。あのバネのようにしなやかで強靭な身体からは此のような突然の死は今もって信じられない。

普通部時代から熱中したラグビーを捨て、予科二年の時に山岳部の精髄に触れて山に転向、ヒマラヤに憧れてひたむきな精進を続け、学徒動員で海軍航空隊に入隊、敵の襲撃で朝鮮海峡に不時着水した時も「俺はヒマラヤに行くまでは死ぬものか」と荒海を漂い、戦後初の日本山岳会マナスル登山でも、第一次から第三次まで続けて参加、第三次では今西隊に続いて遂に念願の山頂に立つ幸運に恵まれた。だがこれも彼の数十年にわたる精進の上に幸運の女神が訪れたと云うべきかも知れない。

終りに彼の名著「山に憑かれた男」に賜った槇さんの序文の一部をここに拝借して彼を偲び冥福を祈りたい。

『…そしてこれが加藤君の性格であって、他ではあり得ないのである。元気で、陽気で、力に溢れ、自分のまわりのものごとをすべて割り切って、山にのみ邁進することは、そう誰にでもできるということではない。生活のため分別を要することのみ多く、そのために遅疑逡巡しなければならないときに、加藤君のごときは、確かに異彩である。と同時に、これはまた、この新時代を迎えた青年に共通する点でもあると思われる。何ものにも屈託せずに進取する気性は、なにも登山だけに限ったことではない…』

## 会務報告

### 十二月理事会

12月9日午後6時30分

場所　本会ルーム

**出席者**　今西会長、大塚、村木両副会長、鳴原、勝山、早坂、小林、織田沢、田部井、大橋、関塚、鈴木、西村、岡沢、新井、大森各理事。太田監事。松田、小倉各評議員

**委任**　松永、橋本、浜口、太田各理事。平林評議員

**審議事項**

●法政大学アンナプルナI峰登山計画（一九八九年）の推薦について　承認

**報告事項**

●支部長会議報告

各支部から理事会への注文として、本部と支部の予定を調整していただきたいこと、及び早目に予定を出して欲しい旨の要望があった。理事会では各委員会に対しては年間予定を早く作ることを求めたい。また、各支部に対しても予定の提出を求めたい。

●委員会報告

▼三国登山　十一月二十日に梱包作業

を完了、パッキングリスト作成、現在タクティックスのつめを行なっている。

募金については、十一月末現在、会員から六三六万円（五一七名）。銀行協会は今月中、電事連は明日返事がある。

▼会報　「お知らせ」の原稿は期限内に各委員会で催しの日程を調整した上で出して欲しい。

▼関塚理事　来年三月の横浜ウェストン祭の実行委員会をそろそろ作って欲しい。

▼図書　望月達夫文庫目録作成。定価五百円。

▼フィルム　会報に出したスライド収集の件は三十枚集まった。

▼高所登山　十二月十九日、三国登山事務所でシンポジウム開催予定。

▼総務　十二月六日の記念山行には、雪にもかかわらず二十三名参加、城山に登る。

▼医療　来年二月二十六日講演会「登山と水分補給」。

▼自然保護　全国自然保護大会には三十七名参加、「森林保護」への提言をまとめる。今後の問題として日本山岳会はどこまで政治性を含む自然保護活動ができるのかを明確にして欲しい。　以上

## ルーム日誌

（12月）

1日　図書委員懇談会
3日　婦人懇談会
5日　支部長会議（年次晩餐会）
7日　自然保護事務局会議
8日　資料委員会
9日　理事会
10日　学生部指導談話会
11日　科学委員会講演会
12日　忘年会（婦人懇主催）
16日　忘年会（三水会）
18日　忘年会（図書委）
19日　忘年会（青年懇主催）
21日　総務委員会
22日　自然保護委員会

ルーム利用者421名

## 会員異動　12月

改姓

金山陽子（九四三〇）
↓池田陽子

物故

加藤喜一郎（二三七一）　12月10日
清田　清（五五四五）　12月20日

・お知らせ・

◉講演会

## 登山と水分補給

登山中の水分補給に関しては、昔からよく議論されているところである。学生時代、バテバテになって、一杯の水を欲しがっても、先輩が飲ましてくれなかったことに対して、恨みを持つ人も多いのではないか。運動生理学の学問が進歩してくると、それが本当に正しいのか、疑問も生じるところである。最近、スポーツドリンク飲用の効能に関する文献も目にする。

実際、登山中、トレーニング後にスポーツドリンクを飲用し、気分がよくなった経験を持つ人は、多いと思われる。今回、この方面の研究の第一人者である方をルームにお招きし、お話しを伺う機会をもうけたので、会員の皆様のご出席をお待ちいたします。

**日時** 二月二十六日（金）
午後七時 ルームにて

**講師** 鈴木政登先生
慈恵医大臨床検査医学

**演題** 登山と水分補給について

**会費** 会場整理費として二〇〇円

医療・集会委員会

＊

◉第十六回 山岳史懇談会

**テーマ** 立教大学山岳部初期の登山

**講師** 堀田弥一氏他二名

**日時** 三月十九日（土）
午後五時三十分より

**場所** 日本山岳会ルーム

図書委員会

＊

◉談話会

科学研究委員会は毎月、談話会を開いて興味ある話題を提供しています。多数会員の参加を歓迎します。

毎回、六時三十分から一時間、本会ルームにおいて、

テーマと話題提供者は左のとおりです。

三月二十五日（金）
登山の行動科学
同シミュレーション　千葉 重美
小山内正夫

人は最も合理的な行動をとるものである。登山で合理性があると考えられるパラメーターをとりあげて行動の説明をする。

四月十五日（金）
山の航空写真あれこれ
大森弘一郎

豊富な経験を語る。

科学研究委員会

## 横浜ウェストン記念祭へのお誘い

ウォルター・ウェストンは、一八八八年に初めて来日、今年は来日百周年に当りますので、ゆかりの横浜聖アンデレ教会で三月二十一日（春分の日）に『横浜ウェストン記念祭』が開催されます。

日本山岳会も後援することになり、会員安江安宣氏（岡山大学名誉教授）の記念講演のほか、各種の資料、著書の展示、スライド映写などが予定されています。会員多数の参加を歓迎します。

**日時** 三月二十一日（月・振替休日）
十三時～十七時

**会場** 横浜聖アンデレ教会（神奈川区三ツ沢下町14の57）
電話〇四五（三二一）四九八八
（横浜駅から地下鉄三ツ沢下町駅下車、徒歩五分）

●記念講演とシンポジウム

**講演**『街中のウェストン』
講師 安江安宣氏
ほかにウェストンの登った山のスライド映写、懇親会を予定。

＊

◉シンポジウム

『危険な動物と安全登山』

詳しくは前月号会報をご覧下さい。

**日時** 四月十六日（土）
午後一時三十分～五時

**場所** 本会ルーム

**参加費** 五百円（予稿集費）

科学研究委員会

**訂正**

会報509号3頁一段目の松商は松高。511号2頁二段目の拍子は拍手、3頁三段目の一九八六年は一九八七年、5頁四段目の原謙二は謙一氏、10頁の新入会員市川佐江子氏住所二二四三は二二三四と訂正をお願いいたします。

●会報編集委員の一部交代

児玉茂委員は事務局職員としての仕事に専念するため降り、代りに大森久男会員が会報編集委員になります。

従って校正、図書紹介等の作業は児玉前委員の手を離れます。会報委員会

昭和六十三年二月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港赤区坂一―三―六 赤坂グレースビル
印刷所 株式会社 技報堂